

1. 講演の概要

都市政策・地域経済ワークショップ1 第3回 議事録

講演の概要 都市政策・地域経済ワークショップ1 第3回 議事録

【テーマ】 倉敷中心市街地のまちづくりと観光、住民の期待と戸惑い

【講師】 中村泰典氏：NPO 法人倉敷町家トラスト代表理事

担当教員：池田 千恵子 准教授

【日時】 2025年4月25日（金）18:30～21:20

【場所】 大阪公立大学大学院 都市経営研究科 梅田サテライト 101 教室

【参加者】 都市政策・地域経済コース M1 学生 他

- 講演者の紹介

本日の講師は、NPO 法人倉敷町家トラスト代表理事の中村泰典様でした。池田先生のご紹介によると、中村泰典様は倉敷美観地区（倉敷川畔重要伝統的建造物群保存地区）で生まれ育ち、まさにその当事者でいらっしゃいます。音楽関係のご出身でありながら、コミュニティFMの立ち上げなどを通してまちづくりにも深く関わってこられました。池田先生とは、サントリー文化財団の助成金をきっかけに知り合わせ、倉敷の観光客増加と住民の思いとの間で生じている状況について意見交換を重ねてこられたとのことでした。

- 講演の目的と内容

中村泰典様は、倉敷の町並み保存の歴史的経緯、その意義、そして現在直面している課題について、ご自身の経験と深い洞察に基づき講演されました。中村泰典様は、2006年から「まちにあかりを灯す」をキーワードに、地域住民とともに町家再生利活用を通じたまちづくりを進めてこられました。その活動は、建物を単に保存するだけではなく、地域の生活文化の継承、育成と創造、及び環境保全を行うことで、建物を活かすことは、資源の有効活用や廃棄物の削減などにも繋がり、持続可能な社会を実現するモデルとなり、「町家利活用は、日本らしい未来をつくること」という理念とともに、全国的にも評価され貢献されてきました。その結果、観光の人気も上向きとなり、無電柱化が進み、町並みの広がりが再認識されました。その反面、京都の様に住民が住む町並みの中に観光客も訪れる外国人なども増え、オーバーツーリズムの影響、居住機能の低下、コミュニティの崩壊、事業者と地域住民の軋轢といった現代的な課題も表面化してしましました。

今回の講義では、時代の変化とともに、倉敷市やNPO 法人倉敷町家トラストが取り組んできた歴史と、現状から、未来へ向けた課題解決ビジョンを紹介されました。また、講演全体を通して、過去の遺産を守りながら未来の持続可能な地域社会をどのように築いていくかという視点を多くの方々の意見も伺いながら、「歴史+都市観光の間には生活と文化が溶け合う居心地のいいまちを作ること=Wellbeing なまちづくり」を進めていきたいと強調されました。中村泰典様は、聴講者である学生や外部参加者に対し、倉敷の現状を踏まえ、様々な知恵を出し合い、活性化に繋げていくことへの期待を表明されました。



(倉敷市公式観光サイトより。町家を改装した個性的なカフェや雑貨屋などのお店。参考引用)



(倉敷市公式観光サイトより。江戸時代から残る白壁の蔵屋敷と洋風建築が調和した美しい町並み参考引用)

2. 倉敷の町並み保存の歴史

－ 倉敷の町並み保存の歴史

倉敷の保存地区指定の経緯

倉敷は、1968年（昭和43年）に全国に先駆けて市独自の条例を制定し、美観地区の保存に取り組み始めました。これは、国が文化財保護法に基づく重要伝統的建造物群保存地区の制度を定めるよりも早い時期の先進的な試みでした。高度経済成長期において、古いものを残すことよりも開発が優先される風潮の中で、倉敷は独自の道を歩み始めたと言えます。特に、倉敷の中心市街地であり、倉敷川畔の町家（大原家・井上家など）と倉庫群、そして周辺の路地などが、200年以上変わらない姿を留めていたことが、保存の機運を高める要因となりました。

保存運動の始まりと経緯

戦後間もない頃、倉敷では民芸運動に関わった人々、郷土史家、建築家といった地元有志が中心となり、町並み保存の活動が始まりました。彼らは、単に立派な建物だけでなく、集落全体の共同体としての価値、そして小さな家々にも宿る美しさに着目し、地域全体の保存を目指しました。この初期の保存運動には、倉敷都市美協会を中心とした戦前の都市美運動とは異なる、生活文化を含めた生活様式という視点がありました。佐藤重夫氏（岡山県出身の日本の建築家。広島大学名誉教授。後の日本民族建築学会会長。2003年没）のような地元の人材が中心となり、観光客への安易な迎合を戒めながら、本質的な価値を訴えたことは特筆されます。また、市民団体と行政が緊密な連携を取り、対話を重ねたことが、その後の保存地区指定に繋がったと考えられます。

－ 戦後の変遷と課題

戦後、日本の多くの都市が高度経済成長の中でスクラップアンドビルドを繰り返す中、倉敷は中心部が商業地として発展する一方で、旧市街地は比較的開発の手が及ばず、古い町並みが残りました。これは、1967年の3市合併（倉敷市、児島市、玉島市）の際に、将来像に関する懇談会で都市計画の専門家の大谷幸夫氏（東京大学出身の日本の建築家、都市計画家、東大名誉教授。丹下健三氏の右腕。2013年没）、稲垣榮三氏、伊藤滋氏らが個性の重要性を提言したこと、そして市民活動と専門家の意見、さらには外国人観光客からの評価が合致したことが大きな契機となりました。しかし、時代が進むにつれて、倉敷の町並み保存地区も新たな課題に直面します。電柱の地中化により景観は大きく向上しましたが、近年ではオーバーツーリズムの影響による混

雑、生活空間への観光客の侵入、土産物店や飲食店への転換による居住機能の低下、地域コミュニティの希薄化、そして事業者と地域住民の間の摩擦などが顕在化しています。特に、近年の急速な店舗の入れ替わりや、無人ゲストハウスの増加などは、地域住民の生活環境に大きな影響を与えています。

3. 町並み保存の意義

中村泰典様は、倉敷の町並み保存の意義を多角的に説明されました。

- 文化遺産としての価値

長年にわたり人々の暮らしが積み重ねられてきた町並みは、単なる古い建物ではなく、その土地の歴史や文化を体現する生きた文化遺産です。写真や映像では伝わらない、その場所に身を置くことで五感を通して感じられる歴史の重みは、かけがえのない価値を持ちます。

- 地域コミュニティの維持

戦前のかつての町は、食住一体の暮らしの中で、環境条件が似たような暮らしがあり、人々が価値観を共有し、助け合いながら生活する地域共同体でした。古い町並みを保存することは、そのようなコミュニティの記憶を繋ぎ止め、現代においても地域社会の繋がりを育む基盤となります。

- 建築技術の継承

伝統的な木造建築の技術は、地域の気候風土に適応し、持続可能性に優れたものでした。釘を使わない工法による部品交換が可能であり、世代を超えて建物を使い続けることを可能にします。町並みを保存することは、そのような貴重な建築技術を次世代に継承する機会となります。

- 地域素材の活用

古い町並みの建物は、その土地で産出された木材をはじめとする自然素材を用いて建てられています。すべてが、地域産の本物であり、保存活動を通じて地域素材の価値を再認識し、現代の建築やまちづくりにおいても地域資源を活用する視点を持つことは重要です。

- 目に見える歴史の体験

古い町並みを歩くことは、過去の人々の暮らしや文化を追体験することに繋がります。それは、教科書や資料だけでは得られない、生きた歴史の学びの場となります。これは、五感で体験できるのです。近年問題となっているオーバーツーリズムは、この歴史体験の質を低下させる可能性があります。また、美観地区においては、長年の住民の生活の中から自然発生的に形成されてきた、いわゆる「パタン・ランゲージ」（まちや建物に繰り返り現れる特徴を「パタン(型)」と捉え、それを「ランゲージ(言語)」として、記述・共有すること。)のようなものが存在しま

す。これは、建物の配置、道路の形状、植栽、生活空間の使い方など、言葉にはされない暗黙のルールや秩序であり、住民にとっての快適性やコミュニティの維持に重要な役割を果たしてきました。一つ一つの行為の積み重ねが時を経て、確実にコミュニティを形成してゆく。つまりパターンを見出してきたのは、住まい手や住民自身です。その環境すべてを五感で感じていただきたいのです。

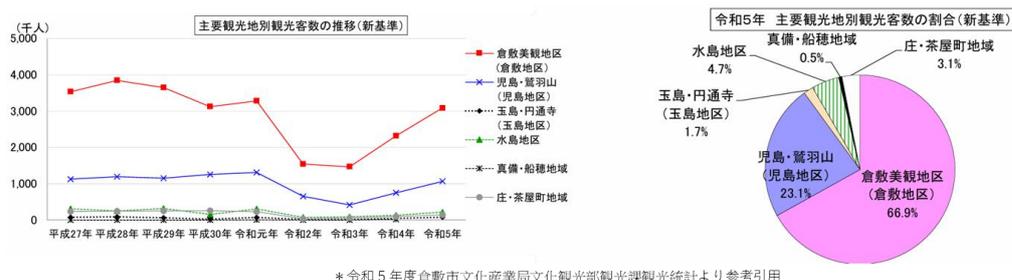
4. 現在の課題

中村泰典様は、倉敷の町並み保存地区が現在直面している具体的な課題を挙げられました。

- オーバーツーリズムの影響

近年、倉敷美観地区は国内外からの観光客が急増し、特に週末などは深刻な混雑が発生しています。これにより、住民の日常生活に支障が出たり、静かで落ち着いた歴史的な景観が損なわれたりするなどの問題が生じています。食べ歩き増加によるゴミ問題や、公共空間の私物化なども懸念されています。

(参考：令和5年度統計によると、令和3年より急上昇)



*令和5年度倉敷市文化産業局文化観光部観光課観光統計より参考引用

- 居住機能の低下

観光客の増加に伴い、古い町家が土産物店や飲食店、宿泊施設などに転用されるケースが増え、住居として利用される割合が減少しています。これにより、地域に住む人が減少し、生活に必要な商店や医療機関などが維持できなくなる可能性があります。それらは、美観地区の観光化や近代化の波の中で、住民にとっての快適性やコミュニティの維持に重要な役割を果たしてきた「パターン・ランゲージ」が理解されないまま、新しい店舗や施設が建設されたり、既存の空間の使い方が変化したりすることで、住民の生活環境や景観が損なわれる懸念も生じています。例えば、かつては住民同士の交流の場であった路地が、観光客の通行路となったり、静かな住環境であった場所に騒がしい店舗が進出したりするなどの変化が見られます。地域住民が共有していた生活空間や、長年の暮らしの中で形成されてきた社会的な繋がりが失われつつあるのです。

- コミュニティの崩壊

居住者の減少と高齢化、そして地域活動への参加意欲の低下などにより、伝統的な町内会や子供会などの地域コミュニティが弱体化しています。観光客との交流も希薄になりがちで、地域の一体感が失われつつあります。

- 事業者と地域住民の軋轢

倉敷美観地区は皆様ご存知の通り、古い町並みが残る観光地ですが、ここ10年でその様相は大きく変わりました。以前は川沿いが中心でしたが、現在は広範囲に観光客が訪れるようになり、住民の生活空間にまで観光客が入り込む、京都に近い状況となっています。

観光振興は間違えると住民にとって大きな負担となる可能性があります。倉敷では、保存地区の町並みを守るために様々な取り組みを行ってきましたが、近年、外部からの新規参入による無人ゲストハウス増加が、倉敷美観地区をはじめとする地域社会に多岐にわたる負の影響を与えています。特に、地域コミュニティの希薄化、宿泊者のマナーや管理体制による生活環境の悪化、無秩序な開発による景観への悪影響を懸念しています。

地域での具体的な事例では、無人ゲストハウス開業による騒音や住民不安がおきたりしています。また、美観地区周辺の高層マンション建設を例にとると、景観課題もあります。これらの一部宿泊事業者の地域配慮不足や防災意識の低さも感じられます。

これらの問題提起の背景には、中村泰典様の「暮らしを大切にすまちづくり」という理念があり、観光客増加による経済効果よりも、地域住民の生活環境とコミュニティ維持を重視する強い思いが感じられ、警笛をならされています。

5. 倉敷の取り組み

このような課題に対し、倉敷市やNPO法人倉敷町家トラストは様々な取り組みを行っています。

- 「くらし・き・になる」エリアプラットフォームの設立

美観地区とその周辺地域を含めたエリア全体の価値を高め、持続可能なまちづくりを目指すためのエリアプラットフォームとして「くらし・き・になる」が設立されました。「暮らしを基に、暮らしを気にしながら」という考え方を重視し、地域住民、事業者、行政などが連携して、様々なプロジェクトを進めています。

- 暮らし文化の再生に向けた取り組み

単なる景観保存だけでなく、地域に根ざした暮らしの文化を再評価し、次世代に継承していくための活動が行われています。長期滞在者が地域に溶け込み、生活を楽しむような仕組みづくりや、伝統的な生活空間の体験プログラムなどが実施されています。

- 観光と地域の共生を目指す取り組み

観光客を排除するのではなく、地域住民の生活と調和した持続可能な観光のあり方を模索しています。観光客と住民双方にとって心地よい環境づくりや、観光客が地域の文化や歴史を深く理解し、尊重するような仕組みづくりが進められています。観光税の導入も検討されていますが、経済的な圧力の中で実現は容易ではありません。

- ウェルビーイングの実現

地域に住む人々、訪れる人々、そして未来の世代、すべての人が幸せになれるようなまちづくりを目指しています。歴史的な環境を維持しながら、現代的なニーズにも応えることのできる、多様で魅力的な地域社会の実現が目標とされています。

6. 課題と展望

中村泰典様は、今後の課題と展望についても言及されました。

- 法制度の課題と対応

現在の文化財保護法や景観条例は、外観の保存に重点が置かれており、内部の利用や地域コミュニティの維持といった点では十分な効果を発揮できていない場合があります。今後は、より包括的な視点に立った法制度の見直しや、地域の実情に合わせた柔軟な運用が求められます。倉敷市東町では、住民によるまちづくり協定の策定が試みられています。

- 地域住民と事業者の協調

持続可能なまちづくりを実現するためには、地域住民と事業者、そして行政がそれぞれの立場を理解し、協力していくことが不可欠です。対話の機会を増やし、共通の目標に向かって連携していくための仕組みづくりが重要となります。

- 持続可能な地域づくりに向けた方策

将来世代に美しい町並みと豊かな暮らしを引き継ぐためには、短期的な経済効果だけでなく、長期的な視点に立ったまちづくりを進める必要があります。地域資源の循環的な活用、環境負荷の低減、多様な世代が共に暮らせる社会システムの構築などが重要な課題となります。NPO 法人倉敷町家トラストでは、「We live in the future of theirs」というキーワードを掲げ、過去から未来へと繋がる時間軸の中で、持続可能な地域社会のあり方を追求しています。流域圏の視点を取り入れた、水を中心としたまちづくりも重要なテーマとして挙げられました。

7. 質疑応答

講演後、活発な質疑応答が行われた。参加者からは、観光客増加による問題、自動車との共存、住民との合意形成、議会の役割、地域間の連携、若者の定住促進、プラットフォームの運営、事業の持続可能性など、多岐にわたる質問が寄せられた。中村泰典様は、自身の経験に基づき、現状の課題や取り組み、今後の展望について率直に回答されました。

質問 1：観光客増加と安易な事業参入に関して

質問者：近年の観光客増加に伴い、地域への深い思い入れ 収益だけを目的としてビジネスに参入する事業者による問題が生じるのではないかと懸念しています。特に、地域住民とのコミュニケーションが希薄になりがちな無人受付型の宿泊施設などは、その象徴ではないかと感じています。地域との繋がりを重視する事業者の育成や、そうでない事業者への対応について、お考えをお聞かせください。

中村泰典様：ご指摘の通り、観光客の増加は経済効果をもたらす一方で、地域への愛着や継続的な関わりを持たない事業者の増加という課題も生んでいます。無人受付はその典型的な例であり、地域住民との交流や情報交換の機会を失わせ、地域のコミュニティを希薄化させる可能性があります。地域との連携を重視し、地域の文化や歴史を尊重する事業者こそ、倉敷の持続的な発展には不可欠です。今後は、そのような事業者を積極的に支援する仕組みや、安易な参入を抑制するような方策も検討していく必要があると考えています。

質問 2：自動車との共存と住民との合意形成に関して

質問者：自動車メーカーでの長年の勤務経験から、町と自動車の関係には強い問題意識を持っています。講演の中で、車を町から排除する意図はないという発言がありましたが、具体的にどのような共存策を考えているのかお聞かせください。また、まちづくりを進める上で、住民からの反対意見や異なる意見が出た場合に、どのように合意形成を図り、事業を推進していくのか、その体制や仕組み、普段のコミュニケーションの場についても教えてください。

中村泰典様：倉敷の旧市街地は、江戸時代の町並みを色濃く残しており、道幅が狭いという構造的な課題があります。そのため、自動車を完全に排除することは現実的ではありません。現在考えている対策としては、速度規制の導入です。時速 20 キロに制限することで、車両の速度を抑制し、歩行者の安全を確保するとともに、ゆっくりと景観を楽しむ観光客以外の通過車両を減らす効果を期待しています。住民との合意形成については、過去の経験から、一部の強硬な意見に左右されるのではなく、多くの住民が納得できるような緩やかなルール作りが重要だと考えています。2年前に作成した冊子「伝建地区の未来へ」はその試みの一つです。今後は、より具体的なまちづくり協定を地域住民の知恵を借りながら作成し、共通認識を形成していく予定です。そのため、毎月開催している理事会などを通じて、住民との意見交換や情報共有を継続的に行っています。

質問 3：議会の役割と景観の維持に関して

質問者：中学校時代に訪れた倉敷の美しい景観が、現在も保存されていることに感銘を受けました。一方で、今後もこの景観を守り続けていくためには、議会の理解と協力が不可欠だと思います。市民の意向を反映させるために、保存を重視する議員を市議会に多く送り込むという手段について、どのようにお考えでしょうか。また、倉敷の古い町並みと新しい町並みの分けや、それぞれの景観をどのように調和させていくのかという点についてもお聞かせください。

中村泰典様: 議会の協力は、まちづくりを進める上で非常に重要です。市民の代表である議員の方々に、倉敷の歴史的価値や保存の重要性を理解していただき、共に取り組んでいくことが理想です。そのためには、私たちからの積極的な情報発信や意見交換、いわゆるロビー活動が不足していると認識しています。また、地域選出の議員が少ないことも、課題の一つだと感じています。景観の維持については、1963年の地図で示された旧市街地を中心に、伝統的な建築様式や素材を尊重した保存を進めていく必要があります。一方で、周辺の新しい建物との調和も重要な課題です。色や高さ、意匠などに関するガイドラインを作成し、地域全体の景観としての統一感を生み出せるよう努めたいと考えていますが、「調和」という概念は人によって異なるため、共通認識の形成が難しいのが現状です。また、美観地区への市の財政投入については、市民の皆様に正しい情報を理解していただく必要性を感じています。

質問 4：保存活動の主体に関して

質問者: 先生のような熱意とリーダーシップのある方がいらっしゃったからこそ、今日の美しい倉敷の町並みが保存されてきたのだと思います。

中村泰典様: そのように評価していただくのは大変光栄ですが、現在の美しい町並みを築き上げてきたのは、私たちではなく、3世代前の先人たちの努力の賜物です。私たちは、その遺産を受け継ぎ、未来へと繋げていく役割を担っています。当時の人々は、行政や議会と真摯に向き合い、議論を重ねながら保存活動を進めてきました。私たちは今、その経験を学び直し、現代の行政とのより良い連携のあり方を模索していく必要があると考えています。

質問 5：「くらし・き・になる」のようなエリアプラットフォームにおける若者の巻き込みについてと、若い世代と共に行うまちづくりに必要なことについて

質問者: エリアプラットフォーム「くらし・き・になる」の活動内容を拝見し、若い世代（大学生や小学生など）を積極的に巻き込んだワークショップなどを開催されていることに感銘を受けました。若い世代と交流する中で感じたことや気づいたことがあれば教えてください。また、これからの街づくりを担う若い世代を巻き込み、共に進めていくために最も重要なことは何だとお考えでしょうか。

中村泰典様: 若い世代との交流は、私たちにとって非常に刺激的であり、新たな視点や発想を得る貴重な機会となっています。高校生などが探究学習の一環として参加してくれることはありますが、継続的な関わりを持つことは難しいと感じています。彼らが主体的に考え、行動できるような場を提供することが重要だと考え、自分たちで運営するカフェなどのアイデアも出ています。若い世代は、私たちにはない斬新なアイデアを生み出す力を持っていますが、経験や知識が不足しているため、そのアイデアが現実的でないこともあります。彼らの熱意と私たちの経験を結びつける、いわば「翻訳者」のような役割を担う人材の育成が、今後の重要な課題だと感じています。

また、このお話は、研究されている池田先生も、リモートでエリアプラットフォームの会議に参加されたそうで、高齢の方が多く印象でしたが、北九州の大学生など若い世代も参加しており、

その多様性に可能性を感じましたと、感想も述べられ、世代間の連携が重要だと改めて感じられたと語られていました。

質問6：オーバーツーリズムと地域連携

質問者：オーバーツーリズムの問題について、私も倉敷を訪れた際に、時期や場所によっては大変な混雑であることを経験しました。人が集中する場所を分散させ、周辺地域と連携して新たな魅力を創出することで、この問題を緩和できるのではないかと考えています。周辺地域との連携や、今後の具体的な展開について、お考えがあれば教えてください。

中村泰典様：オーバーツーリズムは、倉敷にとって深刻な課題であり、早急な対策が必要です。ご提案いただいたように、周辺地域との連携は有効な手段の一つと考えています。現在、「備中ネットワーク」という構想を提案させていただいて、もう一つ、倉敷周辺の備中地域の歴史的な町並みや文化、暮らしぶりを調査し、それぞれの魅力を活かした連携を目指しています。これらの地域には、倉敷にはない独自の魅力があり、連携することで観光客の流れを分散させ、地域全体の活性化に繋がる可能性があります。しかし、地方には人材不足という課題があり、連携を具体的に進めていくには時間がかかるかもしれません。まずは、それぞれの地域で人材を育成し、地域内の連携を強化していくことが重要だと考えています。「備中の町家で暮らす」というイベントは、そのための試みの一つです。

質問7：若者の移住と町家活用

質問者：倉敷が「若者が住めるまち」となる可能性について興味があります。人口減少が進む中で、歴史的な町家の魅力的な住まいとなる可能性を秘めていると思いますが、実際に移住を希望する若者はいるのでしょうか。また、そのような若者に対して、どのようなアプローチを行っているのか教えてください。

中村泰典様：倉敷のエリアプラットフォームでは、空き家バンクのような仕組みを通じて、比較的安価な町家情報を公開しています。驚かれるかもしれませんが、地区に近い町家でも、100万円から200万円程度で購入できる物件もあります。地代も月1万円程度と安価なため、リノベーション費用を考慮しても、若い世代にとっては手の届く価格帯と言えるでしょう。実際に、地域おこし協力隊として倉敷に来た若者が、そのような町家を購入し、改修して住んでいる事例もあります。彼らは、古いものに価値を見出し、自分らしい暮らしを創造することに魅力を感じているようです。今後は、このような若者の移住をさらに促進するために、空き家改修への補助金制度の拡充や、移住に関する情報提供の強化など、より具体的な支援策を検討していく必要があると考えています。

質問8：プラットフォームの運営と世代交代

質問者：地元でプラットフォームを運営しており、人の新陳代謝の重要性を痛感しています。18年間理事会を運営されている中で、メンバーの固定化という課題はないでしょうか。また、もし新しいメンバーが参加されている場合、どのようなきっかけで参加されたのか教えてください。

中村泰典様: NPO 法人倉敷町家トラストにおいては、ご指摘の通り、メンバーの高齢化が進んでおり、世代交代が大きな課題となっています。長年、同じメンバーで運営してきたため、新しい視点や発想を取り入れることが難しくなっています。一方で、「倉敷伝建地区をまもり育てる会」という別の団体では、比較的若い世代の参加が進んでいます。彼らは、倉敷の歴史的な建築物を守り、次世代に継承していくという強い思いを持って活動しており、それが新しい風を吹き込んでくれています。NPO 法人自体の今後のあり方についても議論しており、物件の修復に特化した「一般社団法人くらしきづく Re」を設立しました。今後は、エリアプラットフォームが政策提言などの役割を担い、NPO 法人は解散することも視野に入れていきます。また、以前、町家の修復費用が私の個人負担になっていたため、今後は物件ごとに責任者を明確にする形で事業を進めていく予定です。若い世代が参画しやすいように、収益性を高め、持続可能な運営体制を構築していくことが今後の重要な課題です。

以上、質疑に関しては、中村泰典様から、初期段階では、様々な思いで NPO を立ち上げられ、コロナ期を乗り越えると、多くの方々が周辺地区へも急激に観光に訪れるようになり、観光客が生活者エリアにも入り込んで来ることで、住民としての戸惑いもお話しいただきました。地域住民の店舗が観光施設に変わることや、商業施設の立ち退き、地域住民の居場所の喪失といった問題提起があり、参加者はメモを取りながら熱心に聞き入っており、質疑に関しては、全国的にも有名な倉敷の話題だけに、多くの質問の中、率直なリアルな学びをいただきました。

8. 終わりに

本日は、中村泰典様より倉敷中心市街地のまちづくりと観光、そして住民の皆様の期待と戸惑いについて、大変貴重なお話をお聞かせいただき、学びの多い一日となりました。美観地区の保存という先駆的な取り組みの歴史から、現在直面されているオーバーツーリズム、居住機能の低下、コミュニティの課題、そして未来に向けた「ウェルビーイングなまちづくり」のビジョンまで、多岐にわたるお話は、今回、議事を担当させていただきました私としても、都市政策・地域経済を学ぶ院生として深く考えさせられるものでした。

特に、地域住民の生活と観光の調和、歴史的遺産を守りながら持続可能な時代に合った地域環境を築くという中村泰典様の熱意と、そのための具体的な取り組みについて伺い、大変感銘を受けました。質疑応答での率直で真摯なご回答からは、現場のリアルな状況と、未来への強い思いが伝わってきました。

長年にわたり、倉敷のまちづくりに情熱を注いでこられた中村泰典様に、心より敬意を表しますとともに、今後のご活躍を心から応援していきたく思います。
ありがとうございました。

議事作成担当：松木勝美